

金剛經

259
422

特
2

016432-001-2

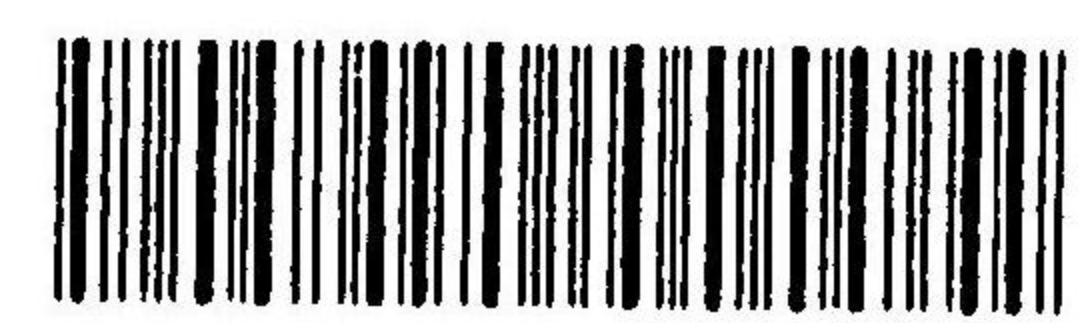
特66-214

金剛般若波羅蜜教

金剛經会和訓

M42

ABC-2301



諦かに信ずるの心一刹那もあらば、信心成佛河沙に満てん、
若し人波羅密を信ぜずんば、萬劫にも愛河を出つるに因無
し、金剛般若波羅密、凡聖の法門此より出づ、威光赫々と
して乾坤に耀く、廓落空々として朕迹無し、甚深般若波羅
密、晃々明々として杲日の如し、山河大地一照の中、綿々
密々として窮極無し、摩訶般若波羅密、功德量り難し人測
ること罕なり、展る則には無邊にして塵刹に遍し、收る則
には毛頭も立すること能はず、君に勸む深く大摩訶を信ぜ

よ、利他自利福彌々多し、闍提は心の成佛を信せず、我今
重て更に摩訶を讚す、人有て若三途の苦を受けんに、至心
に大金剛を持誦せば、釵樹も化して花果と爲て秀でん、鏤
湯も變じて玉池の塘と作らん、若し人軍陣にして兵に圍遶
せられんにも、一心に常に大金剛を誦せば、千般の劍戟も
能く害するを無し、干戈も散するを無くして刀鎗を免れん、
久しく獄囚に禁ぜられて出離を求めんに、心を發して大金
剛を持誦せば、枷鎖も自然に皆解脱し、罪原し放すること

無れども災殃勿ん、或は經商と作て江海を渡らん、惡風
に飄墮せられて毒龍に傷られんにも、至心に金剛を稱念せ
ば、浪息み風停つて岸の傍に到らん、山林を跋渉して猛獸
に逢ひ、虎狼獅子趕て驚き忙きにも、心を舉て金剛を稱念
せば、毒蛇猛獸伏し潛み藏れん、若し人又諸の親眷に別れ
て、他方に流落して道路の長らんにも、心を發して金剛を
持誦せば、睡中に驚き覺て家郷に在らん、人有つて疾病す
るに醫療無く、床枕酸疼して肺腸に徹せんにも、一心に金

剛を誦持せば、即時に疼み愈て安康なるを得ん。若し冤
家に有て解釋し難く、互に相侵暴して兩ら傷に遭はんにも、
堅心に金剛を持誦せば、萬般の災害變じて祥と爲らん、忽
ち臨終將に命盡んとする有らんにも、心中に常に大金剛を
説かば、託生宿命分明に記し、福は卿相と爲り貴名揚らん、
少きより六親亡没すると早くして、悲心に孝を行じて爺孃
を憶ふて、金剛經一卷を持施せば、慈親夢に託して天堂に
上らん、此經持誦すれば福量り難く、感應窮り無し豈揚る

に勝えんや、勸め奉る現前の諸佛子、同く金剛の大道場に入んを。

頌に曰く、禽獸も此法を樂ふ、人として此經を持せざらんや、今生若し蹉過せば、萬劫切かに聞き難からん。

金剛經啓請

若し人有りて、此經を受持せんには、先づ須らく至心に淨口業の眞言を念し然して後に八金剛四菩薩の名號を啓請すべし、所在の處常に當に擁護し給ふ。

淨口業眞言

脩唎脩唎、摩訶脩唎、脩修唎、薩婆訶

安土地眞言

南無三滿多 沒馱喃 唵 度嚩度嚩 地尾 薩婆訶

普供養眞言

唵、誑誑難 三婆嚩 穢日囉斛

奉請八金剛神

青除災金剛神 辟毒金剛神 黃隨求金剛神 白淨水金剛神 赤聲火金剛神
定持災金剛神 紫賢金剛神 大神金剛神

奉請四菩薩(四無量心)

金剛眷菩薩(慈) 金剛索菩薩(悲)
金剛愛菩薩(喜) 金剛語菩薩(捨)

發願文

稽首す三界尊、歸命す十方佛、我今弘く願を發して、此金剛經を持す、上四
重の恩を報し、下三途の苦を濟ふ、若し見聞する者有らば、悉く菩提心を發

し、此一報身を盡して、同じく極樂國に生せんことを。

云何梵

云何んか、長壽金剛不壞の身を得ん、復何の因縁を以てか大堅固の力を得ん、
云何んか此の經に於て究竟して彼岸に到らん、願くは佛微蜜を開きて、廣く
衆生の爲めに説きたまへ。

開經偈

無上甚深の微妙法は、百千萬劫にも遭ひ遇ふこと難し、我今見聞し受持することを得たり、願くは如来眞實義を解せむ。

金剛般若波羅蜜經

金剛經會和訓

法會因由分第一

是の如く我れ聞く、一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園にましまして、大比丘衆千二百五十人と俱なりき、爾の時に世尊、食時に衣を著け鉢を持して舍衛大城に入りて、食を其

城中に乞ひ給ふ、次第に乞ひ已て、還て本所に至り、飯食し訖て、衣鉢を收め足を洗ひ已て座を敷いて坐し給ふ。

善現啓請分第二

時に、長老須菩提、大衆の中に在り、即ち座より起ちて偏へに右の肩を袒き、右の膝を地に著け合掌恭敬して而も佛に白して言く、希有なり、世尊、如來は善く諸の菩薩を護念し善く諸の菩薩に付囑し給ふ、世尊、善男子善女人、阿

耨多羅三藐三菩提心を發せん者は云何か應に住すべきや、云何か其心を降伏せんや、佛言く、善哉善哉、須菩提、汝の説く所の如し、如來は善く諸の菩薩を護念し、善く諸の菩薩に付囑す、汝今諦に聽け、當に汝が爲めに説くべし、善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提心を發せば應に是くの如くに住し、是の如く其心を降伏すべし、唯然り、世尊願樂して聞かんと欲す。

大乘正宗分第三

佛、須菩提に告給はく、諸の菩薩摩訶薩、應に是の如く其心を降伏すべしとは、所有一切衆生の類、若くは卵生、若くは胎生、若くは濕生、若くは化生、若くは有色、若くは無色、若くは有想、若くは無想、若くは非有想、若くは非無想、我皆無餘涅槃に入れて而も之を滅度せしむ、是の如く、無量無數無邊の衆生を滅度すれども、實には衆生の滅

度を得るものなし、何を以ての故に、須菩提、若し菩薩に我相、人相、衆生相、壽者相あれば即ち菩薩には非ず。

妙行無住分第四

復次に、須菩提、菩薩は法に於て應に住する所無ふして布施を行すべし、所謂、色に住せずして布施し、聲香味觸法に住せずして布施せよ、須菩提、菩薩は應に是の如く布施して相に住せざるべし、何を以ての故となれば、若し菩薩

相に住せずして布施するは其福德思量すべからず、須菩提
意に於て如何、東方の虚空思量すべきや不や、不なり世尊
須菩提、南西北方四維上下の虚空思量すべきや不や、不なり
世尊、須菩提、菩薩の相に住するとなき布施の福德も亦復
是の如く思量すべからず、須菩提、菩薩は但應に教ふる所
の如く住すべし。

如理實見分第五

須菩提、意に於て云何、身相を以て如來を見たてまつるべき
や不や、不なり世尊、身相を以て如來を見たてまつること
を得べからず、何を以ての故になれば如來の説き給ふ所の
身相は即ち身相にあらず、佛、須菩提に告ぐ、凡そ所有相は
皆是虚妄なり、若し諸相の相に非らざることを見れば即ち
如來を見る。

正信希有分第六

須菩提、佛に白して言く、世尊頗る衆生の是くの如き言説
 章句を聞くことを得て、實信を生ずることありや不や、佛
 須菩提に告ぐ是の説を作すこと莫れ、如來の滅後五百歳に
 持戒修福の者、此章句に於て能く信心を生じ、此を以て實
 とするものあらば當に知るべし是の人は、一佛二佛三四五
 佛に於て、而も善根を植うるのみにあらず、已に無量千萬
 佛の所に於て諸の善根を植ゆるなり、是の章句を聞いて乃
 至一念も、淨信を生ずる者は、須菩提、如來は是の諸の衆

生は是くの如き無量の福德を得といふことを悉く知り悉く
 見給ふ、何を以ての故となれば是諸の衆生は復た我相も人
 相も衆生相も壽者相もなく、法相もなく亦非法相もなし、
 何を以ての故となれば、是諸の衆生、若し心に相を取らば、
 即ち我と人と衆生と壽者とに著となす、若し法相を取るも
 即ち我と人と衆生と壽者とに著す、何を以ての故となれば
 若し非法相を取るも、即ち我と人と衆生と壽者とに著す、
 是の故に法をも取るべからず、非法をも取るべからず、是

の義を以ての故に如來常に汝等比丘我が説法は筏喩の如きものと知れ、法すら尙捨つべし何か況んや非法をやと説き給ふ。

無得無説分第七

須菩提、意に於て云何、如來は阿耨多羅三藐三菩提を得給ふや、如來に説き玉ふ所の法有りや、須菩提言く、世尊我が佛の説き給ふ所の義を解するが如きは定法の阿耨多羅三

藐三菩提と名るものあることなく亦定法の如來の説くべきものあることなし、何を以ての故となれば、如來の説き給ふ所の法は皆取るべからず、説くべからず、法にあらざる非法にあらざる、所以は云何、一切の賢聖は皆無爲の法に而も差別あるを以てなり。

依法出生分第八

須菩提、意に於て云何、若し人三千大千世界に満つる七寶

を以て布施に用ゐん、是人の得る所の福德は寧ろ多しとせ
んや不や、須菩提言く、甚だ多し世尊、何を以ての故なれ
ば、是の福德は即ち福德にあらざるの性、是故に如來は福
徳多しと説き給ふ、若し復人の此經中に於て乃至四句の偈
等を受持し他人の爲めに説くことあらば、其福は彼れより
も勝れたり、何を以ての故なれば、須菩提、一切の諸佛及
び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づ、
須菩提、所謂佛と法とは即ち佛と法とに非ず。

一相無相分第九

須菩提、意に於て云何、須陀洹は能く是れ我は須陀洹果を
得たりと念ふことを作さんや不や、須菩提の言く不なり世
尊、何を以ての故となれば、須陀洹を名けて入流と爲す、
而れども入る所なし、色聲香味觸法に入らず、是を須陀洹
と名く、須菩提、意に於て云何、斯陀含は能く是れ我は斯
陀含果を得たりと念ふことを作さんや不や、須菩提の言く

不なり世尊、何を以ての故となれば、斯陀含を一往來と名く
而れとも實に往來なし、是を斯陀含と名く、須菩提、意に
於て云何、阿那含は能く是れ我は阿那含果を得たりと念ふ
ことを作さんや不や、須菩提の言く不なり世尊、何を以て
の故となれば、阿那含を名けて不來となす、而れとも實に
不來なし、是故に阿那含と名く、須菩提意に於て云何、阿
羅漢は能く是れ我は阿羅漢道を得たりと念ふことを作さんや
不や、須菩提言く不なり世尊、何を以ての故となれば、實

に法の阿羅漢と名くるもの有ることなし、世尊若し阿羅漢
是の念を作さん我は阿羅漢道を得たりと、即ち我と人と衆
生と壽者とに著すとなす、世尊、佛我れ無諍三昧を得て人
中に最も第一たり、是れ第一の欲を離る、阿羅漢と説けど
も、世尊我は是の念を作さず、我は是れ離欲の阿羅漢なり
と、世尊、我れ若し我は阿羅漢道を得たりと念ふことを作
さば世尊は即ち須菩提は是れ阿蘭那の行を樂ふ者と説き給
はず、須菩提實に所行無きを以て而も須菩提は是れ阿蘭那

の行を樂ふと名け給ふ。

莊嚴淨土分第十

佛、須菩提に告く、意に於て云何、如來は昔し燃燈佛の所にましまして法に於て所得ありしや不や、不なり世尊、如來は然燈佛の所に在て法に於て實に所得なし、須菩提意に於て云何、菩薩は佛土を莊嚴するや不や、不なり世尊、何を以ての故となれば佛土を莊嚴すと云ふは即ち莊嚴に非ず

是を莊嚴と名く、是の故に須菩提諸の菩薩摩訶薩は、應に是くの如く清淨の心を生ずべし、色に住して心を生ずべからず、聲香味觸法に住して心を生ずべからず、應に住する所無うして而も其心を生ずべし、須菩提譬へば人の身の須彌山王の如きもの有るが如くんば、意に於て如何、此の身は大とせんや否や、須菩提言く甚だ大なり、何を以ての故となれば佛は身にあらざる是を大身と名くと説き給ふ。

無爲福勝分第十一

須菩提、恒河の中に、所有沙の如き是の如くの沙と等しき
恒河をば意に於て云何ん、是の諸の恒河の沙は寧ろ多しと
せんや不や、須菩提の言く甚だ多し、世尊、但諸の恒河す
ら尙多きこと無數ならん、何に況んや其沙をや、須菩提、
我今實言もて汝に告ぐ、若し善男子善女人有りて、七寶を
以て、爾所の恒河の沙の數の三千大千世界に満て以て布施

に用ゐんには福を得ること多からんや不や、須菩提の言く
甚だ多からん世尊、佛、須菩提に告ぐ、若し善男子善女人、
此經中に於て乃至四句の偈等を受持して他人の爲めに説か
ば、而も此福德は前の福德に勝れたり。

尊重正教分第十二

復次に須菩提、隨て是經の乃至四句偈等を説かんに、當に
知るべし、此の處は、一切世間天人阿修羅應に供養するこ

と佛の塔廟の如くすべし、何に況んや人の盡く能く受持讀誦する者あるをや、當に知るべし是の人は、最上第一希有の法を成就す、若し是の經典の在るところには即ち佛若しくは尊重の弟子ましますとなす。

如法受持分第十三

爾時に須菩提、佛に白して言く、世尊當に何とか此經を名くへき我等如何が奉持せん、佛、須菩提に告ぐ、是經を名

けて金剛般若波羅蜜となす是の名字を以て汝當に奉持すべし、所以は何ん、須菩提、佛は般若波羅蜜は般若波羅蜜にあらず是を般若波羅蜜と名くと説き給ふ、須菩提、意に於て云何、如來に説き給ふ法ありや不や、須菩提、佛に白して言く、世尊如來は説き給ふ所なし、須菩提、意に於て云何、三千大千世界の有ゆる微塵是を多しと爲さんや不や、須菩提、言く、甚だ多し世尊、須菩提、諸の微塵も如來は微塵に非ず是を微塵と名くと説き給ふ、如來は世界は世界に非ず、

是を世界と名くと説き給ふ、須菩提意に於て云何、三十二相を以て如來を見奉るべきや不や、不なり世尊、三十二相を以て如來を見ることを得べからず、何を以ての故となれば、如來は三十二相は即是れ相に非ず是を三十二相と名くと説き給ふ、須菩提若し善男子善女子恒河の沙に等しき身命を以て布施する事あらんに若し復人ありて此經中に於て乃至四句偈等を受持して他人の爲めに説かば其福は甚だ多し。

離相寂滅分第十四

爾時に、須菩提此經を説き給ふを聞て、深く義趣を解し涕淚悲泣して而も佛に白して言さく、希有なり世尊、佛の是の如き甚深の經典を説き給ふ、我昔より來、得る所の慧眼も未だ曾て是くの如きの經を聞くことを得ざりき、世尊若し復人有りて、是經を聞くことを得て信心清淨ならば、即ち實相を生ぜん、當に知るべし、此人は第一希有の功德を成

就す、世尊是の實相とは即是れ相に非ず、是の故に如來は實相と名くと説き給ふ、世尊我今是の如きの經典を聞くを得て心解して受持するとは難しと爲すに足らず、若し當來の世、後の五百歳に其れ衆生有りて、此經を聞くを得て信解受持せん、是の人は即ち第一の希有となすべし、何を以ての故となれば、此人は我相もなく人相もなく衆生相もなく壽者相もなからん、所以は何ん我相は即ち是れ相にあらず、人相も衆生相も壽者相も即ち是れ相に非らず、何を

以ての故に一切の諸相を離るゝを即ち諸佛と名く、佛須菩提に告ぐ如是如是、若し復た人有りて是の經を聞くことを得て驚かず怖れず畏れざらん、當に知るべし是の人は甚だ希有となす、何を以ての故に、須菩提、如來は第一波羅蜜は即ち第一波羅蜜に非ず是を第一波羅蜜と名くと説き給ふ須菩提忍辱波羅蜜は如來は忍辱波羅蜜に非ず是を忍辱波羅蜜と名くと説き給ふ、何を以ての故に、須菩提、我れ昔歌利王に身體を割截せらるゝが如き、我れ其時に於て、我相

もなく人相もなく衆生相もなく壽者相もなし、何を以ての故に、我れ往昔、節々支解の時に於て若し我相人相衆生相壽者相あらば應に瞋恨を生ずべし、須菩提又過去を念ずるに五百世に於て、忍辱仙人となる、爾所世に於て、我相もなく人相もなく衆生相もなく壽者相もなかりき、是故に須菩提菩薩は應に一切の相を離れて阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし、色に住して心を生ずべからず、聲香味觸法に住して心を生ずべからず、應に所住なき心を生ずべし、若し

心に住有るは即ち住に非ずとなす、是故に、佛は菩薩は心に住して布施すべからずと説き給ふ、須菩提、菩薩は一切衆生を利益せんが爲めの故に應に是くの如く布施すべし如來は一切諸相は即是れ相に非ずと説き給ふ又一切衆生は即ち衆生に非ずと説き給ふ、須菩提、如來は是れ眞語の者實語の者、如語の者、不誑語の者、不異語の者なり、如來の得給ふ所の法、此法は實もなし虚もなし、須菩提、若し菩薩、心法に住して布施を行せば、人の闇に入りて即ち見

る所なきが如し、若し菩薩、心法に住せずして布施を行せば、人の目ありて、日光明に照し、種々の色を見るが如し、須菩提、當來の世に若し善男子善女人有りて、能く此經に於て受持讀誦せば即ち如來は佛知慧を以て悉く此の人を知り、悉く此の人を見給ふが爲めに、皆無量無邊の功德を成就することを得ん。

持經功德分第十五

須菩提、若し善男子善女人有りて、初日分に恒河の沙に等しき身を以て布施し、中日分に復恒河の沙に等しき身を以て布施し、後日分にも亦恒河の沙に等しき身を以て布施し、此くの如く無量百千萬億劫の間身を以て布施せんに、若復人有りて此經典を聞て信心にして逆はずんば、其福は彼よりも勝れたり、何に況んや、書寫し受持し讀誦し人の爲めに解説せんをや、須菩提要を以て之を言は、是經には不可思議不可稱量無邊の功德あり、如來は大乗を發する者の爲

めに説く、最上乘を發する者の爲めに説く、若人有りて能く受持し讀誦し廣く人の爲めに説かば、如來は悉く是の人を知り、悉く是の人を見給ふ、皆不可量不可稱無有邊不可思議の功德を成就することを得ん、是の如き人等は即ち如來の阿耨多羅三藐三菩提を荷擔すとなす、何を以ての故となれば、須菩提若し小法を樂ふ者は、我見と人見と衆生見と壽者見とに著す、即ち此經に於て、聽受し讀誦し人の爲めに解説すること能はず、須菩提在々處々若し此經有らば一

切世間の天人阿修羅應に供養すべき所なり、當に知るべし此の處は即是に塔たり、皆應に恭敬し作禮し圍饒し、諸の華香を以て而も其處に散ずべし。

能淨業障分第十六

復次に、須菩提、若し善男子善女人、此經を受持讀誦して人に輕賤せらるゝが如きは是の人先世の罪業にて應しく惡道に墮つべきに今世の人輕賤するを以ての故に先世の罪業

即ち爲めに消滅して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、
 須菩提、我れ過去無量阿僧祇劫を念ふに、然燈佛より前に
 於て、八百四千萬億那由他の諸佛に値ふことを得て、悉皆
 供養承事して空しく過ぐる者なかりき、若し復た人有りて
 後の末世に、能く此經を受持讀誦する者の得る所の功德は
 我が諸佛を供養する所の功德に於て、百分の一にも及ばず、
 千萬億分乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり、須菩提、若
 し善男子善女人後の末世に於て、此經を受持讀誦して、得
 る所の功德は、我若し具さに説く者あらんには、或は人有
 つて聞かば心即ち狂亂し狐疑して信ぜざる事あるべし、須
 菩提、當に知るべし、是の經の義は不可思議にして果報も
 亦不可思議なり。

究竟無我分第十七

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、世尊善男子善女人
 阿耨多羅三藐三菩提を發せんには云何んか應に住すべき云

何んか其心を降伏せん、佛、須菩提に告ぐ善男子善女人阿
 耨多羅三藐三菩提心を發せん者は當に是くの如くの心を生
 ずべし、我應に一切衆生を滅度すべし、一切衆生を滅度し
 已て而も一りも衆生の實に滅度するものあることなし、何
 を以ての故となれば、若し菩薩に我相と人相と衆生相と壽
 者相と有らば、即ち菩薩に非ず、所以は何ん、須菩提實に
 法として阿耨多羅三藐三菩提心を發するもの有ることなし
 須菩提、意に於て如何、如來は然燈佛の所に於て法として

阿耨多羅三藐三菩提を得ることありや不や、不なり世尊、
 我が佛の説き給ふ所の義を解するが如きは、佛は然燈佛の
 所に於て、法として阿耨多羅三藐三菩提を得給ふことある
 ことなし、佛言く如是如是、須菩提實に法として如來の阿
 耨多羅三藐三菩提を得給ふものあることなし、須菩提若し
 法として如來の阿耨多羅三藐三菩提を得給ふものあらば然
 燈佛は即ち我れに汝來世に於て當に作佛を得て釋迦牟尼と
 號すべしと授記を與へず、實に法として阿耨多羅三藐三菩

提を得ることあることなきを以て、是の故に然燈佛我に授記
 を與へて、是の言を作し給ふ、汝來世に於て佛と作りて釋
 迦牟尼と號するを得べしと、何を以ての故となれば、如
 來とは即ち諸法如の義なり、若人有りて、如來は阿耨多羅
 三藐三菩提を得給ふと言はん、須菩提實に法として佛の阿
 耨多羅三藐三菩提を得給ふこと有ることなし、須菩提如來
 の得給ふ所の阿耨多羅三藐三菩提は、是の中に於て實もな
 く虚もなし、是の故に如來は一切の法は皆是れ佛法なりと

説き給ふ、須菩提言ふ所の一切の法とは即ち一切の法にあ
 らず是の故に一切の法と名く、須菩提譬へば人の身の長大
 なるが如し、須菩提言く世尊如來は人の身の長大は即ち大
 身に非ずとなす是を大身と名くと説き給ふ、須菩提菩薩も
 亦是くの如し、若し是の言をなさん、我當に無量の衆生を
 滅度すべしと、即ち菩薩と名けず、何を以ての故となれば、
 須菩提實に法として名けて菩薩とする者あるとなし、是の
 故に佛の一切の法は我もなく人もなく衆生もなく、壽者も

なしと説き給ふ、須菩提若し菩薩此の言をなさん、我當に
佛土を莊嚴すべしと是れを菩薩と名けず、何を以ての故と
なれば、如來は佛土を莊嚴すとは即ち莊嚴にあらず、是を
莊嚴と名くと説き給ふ、須菩提若し菩薩無我の法に通達す
る者は如來は眞の是れ菩薩と名くと説き給ふ。

一體同觀分第十八

須菩提意に於て云何、如來肉眼ありや不や、是の如し世尊、

如來に肉眼有ます、須菩提意に於て如何、如來に天眼あり
や不や、是の如し世尊、如來に天眼有ます、須菩提意に於
て云何、如來に慧眼ありや不や、是の如し世尊如來に慧眼
有ます、須菩提意に於て云何、如來に法眼ありや不や、是
の如し世尊、如來に法眼有ます、須菩提意に於て云何、如
來に佛眼ありや不や、是の如し世尊、如來に佛眼有ます、
須菩提意に於て云何、恆河の中の所有沙の數の如き、佛是
の沙の數を説き玉ふや不や、是の如し世尊、如來の此沙の

數を説き玉ふ、須菩提意に於て云何、一つの恒河の中の所
有沙の數の如きは是くの如くの沙の數に等しき恒河ありて是
の諸の恒河に所有沙の數の佛世界あらば是の如きは寧ろ多
しとなさんや不や、甚だ多し世尊、佛須菩提に告げて宣は
く、爾所の國土の中の所有衆生の若干種の心は、如來悉く
知り給ふ、何を以ての故に如來は諸心皆非心たり是を名け
て心となすと説き給ふ、所以は云何、須菩提過去の心も不
可得現在の心も不可得未來の心も不可得なればなり。

法界通化分第十九

須菩提意に於て云何、若し人有りて三千大千世界に滿つる
七寶を以て用ひて布施せんには是人の因縁を以て福を得る
と多きや不や、是の如し世尊、此の人は是の因縁を以て福を
得ること甚だ多からん、須菩提若し福德に實あらば如來は
福德を得ること多しと説き玉はず、福德無なるを以ての故
に如來は福德を得ること多しと説き給ふ。

離色離相分第二十

須菩提意に於て云何、佛は具足色身を以て見たてまつるべきか不や、不なり世尊、如來は具足色身を以て見たてまつるべからず、何を以ての故に如來は具足色身は即ち具足色身にあらず是を具足色身と名くと説き玉ふ、須菩提意に於て云何如來は具足諸相を以て見たてまつるべきや不や、不なり世尊、如來は具足諸相を以て見たてまつらず、何を以

ての故に如來は諸相具足は即ち具足にあらず、是を諸相具足と名くと説き給ふ。

非説所説分第二十一

須菩提、汝如來は是の念を作し玉ふと謂ふと勿れ、我れ當に説法する所あるべしと是の念を作すこと勿れ、何を以ての故に、若し人如來に所説の法ありと言はば、即ち佛を謗るとなす、我が所説を解すること能はざるが故に、須菩提

説法には法を説くべきなき是を説法と名く、爾時に慧命須菩提、佛に白して言く、世尊頗る衆生の未來世に於て是の法を説くことを聞て信心を生ずることあらんや不や、佛、須菩提に告て宣はく、彼れ衆生にあらず不衆生に非ず、何を以ての故に、須菩提、衆生、衆生とは如來、衆生にあらず是を衆生と名くと説き給ふ。

無法不得分第二十二

須菩提、佛に白して言く、世尊、佛の阿耨多羅三藐三菩提を得給ふは得る所なしとせんや、佛の言く、如是如是、須菩提、我れ阿耨多羅三藐三菩提に於て乃至少法の得べきもの有ることなし、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く。

淨心行善分第二十三

復次に須菩提是の法は平等にして高下あることなし、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く、我もなく人もなく衆生もなく

壽者もなくして一切の善法を修するを以て即ち阿耨多羅三藐三菩提を得、須菩提言ふ所の善法とは如來は即ち善法にあらず是を善法と名くと説き給ふ

福智無比分第二十四

須菩提若し三千大千世界の中に所有諸の須彌山王、是くの如きに等しき七寶聚を人有りて持して用て布施せん、若し人此般若波羅蜜經乃至四句の偈等を以て受持し讀誦して他人の爲めに説かば、於前きの福德は百分の一にも及ばず、百千萬億分乃至算數比喩も及ぶこと能はざる所なり。

化無所化分第二十五

須菩提意に於て云何、汝等謂ふこと勿れ、如來はこの念を作し給ふと、我れ當に衆生を度すべしと、須菩提是の念を作すことなかれ、何を以ての故に、實に衆生の如來の度し給ふ者あることなし、若し衆生の如來の度し給ふものあら

五八
ば、如來は即ち我も人も衆生も壽者も有らん、須菩提如來の我ありと説き給ふものは即ち我あるにあらず、而れども凡夫の人は我ありと思へり、須菩提、凡夫と云ふは、如來は即ち凡夫にあらず是を凡夫と名くと説き給ふ。

法身非相分第二十六

須菩提意に於て云何、三十二相を以て如來を觀止したてまつるべきや不や、須菩提言く、如是如是、三十二相を以て

如來を觀じたてまつらん、佛須菩提に告ぐ若し三十二相を以て如來を觀じ上る者ならば轉輪聖王は即ち是れ如來ならんか、須菩提、佛に白して言く、世尊我が佛の説き給ふ所の義を解するが如きは、應に三十二相を以て如來を觀じたてまつるべからず、爾の時に世尊而も偈を説いて言く、若し色を以て我れを見、音聲を以て我を求めば、是の人は邪道を行ず、如來を見ること能はず。

無斷無我分第二十七

須菩提、汝若し是の念を作さん、如來は具足の相を以てせざるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得給ふと、須菩提、是の念を作すこと莫れ、如來は具足の相を以てせざるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得給ふと、須菩提、汝若し是の念を作さん阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は諸法は斷滅の相と説くと、是の念を作すこと莫れ、何を以ての故に、阿耨多羅三

藐三菩提心を發する者は法に於て斷滅の相をば説かず。

不受不貪分第二十八

須菩提、若し菩薩恒河の沙に等しき世界に滿てん、七寶を以て持ち用ゐて布施せん、若し復た人有りて一切の法は我なしと知りて忍を成することを得れば、此菩薩は前の菩薩の得る所の功德に勝れり、何を以ての故に須菩提、諸の菩薩は福德を受けざるを以ての故に、須菩提佛に曰して言く、世

尊云何ぞ菩薩は福德を受けざるや、須菩提菩薩は作すとこ
ろの福德に貪著すべからず、是の故に福德を受けずと説く。

威儀寂靜分第二十九

須菩提若し人有りて、如來は若しくは來り若しくは去り、
若しくは坐し、若しくは臥すと言はば、是の人は我が説く所
の義を解せず、何を以ての故に如來と云ふは從つて來る所
もなく亦去る所も無し、故に如來と名く。

一合理相分第三十

須菩提若し善男子善女人、三千大千世界を以て碎て微塵と
なせば意に於て云何ん是の微塵衆は寧ろ多しと爲さんや不
や、須菩提の言く、甚だ多し世尊、何を以ての故に若し此
微塵衆實に有らば佛は即ち是の微塵衆を説き給はず、所以
は何ん、佛は微塵衆は即微塵衆にあらず是を微塵衆と名く
と説き給ふ、世尊、如來の説き給ふ所の三千大千世界も即

ち世界にあらず是を世界と名く何を以ての故に若し世界實
に有ならば即是れ一合相なり、如來は一合相は即ち一合相
にあらず、是を一合相と名くと説き玉ふ、須菩提一合相と云
ふは即ち是れ説くべからず但し凡夫の人は其事に貪著す。

智見不生分第三十一

須菩提若し人言はん、佛は我見人見衆生見壽者見を説き給
ふと、須菩提意に於て云何、是の人我が説く所の義を解す

るや不や、不なり世尊、是の人如來所説の義を解せず、何
を以ての故に世尊は我見人見衆生見壽者見は即ち我見人見
衆生見壽衆見にあらず、是を我見人見衆生見壽者見と名く
と説き給ふ、須菩提阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は一
切の法に於て應に是の如く知り是の如く見、是くの如く信
解して法相を生ぜざるべし、須菩提言ふ所の法相なる相も
如來は即ち法相にあらず是を法相と名くと説き玉ふ。

應化非眞分第三十二

須菩提、若し人有りて、無量阿僧祇世界に満てん七寶を以て布施に持用ゐん、若し善男子善女人、菩提心を發する者ありて、此經乃至四句偈等を持して受持讀誦し人の爲めに演說せば、其福は彼れよりも勝れたり、云何が人の爲めに演說せん、相を取らざれば如如にして不動なり、何を以ての故に、

一切有爲の法は、夢幻泡影の如し、露の如く亦電の如し、應に如是の觀を作すべし。

佛是の經を説き已れば、長老須菩提及び諸の比丘比丘尼優婆塞優婆夷一切世間天人阿修羅等、佛の諸説を聞きて皆大に歡喜して信受奉行しき。

金剛般若波羅蜜經(了)

補闕圓滿眞言

唵、呼嚧呼嚧、社野穆契、娑婆訶

普回向

願くは此の功徳を以て
普く一切に及ぼし我等
と衆生と皆共に佛道を
成せむことを。

真歇和尚の跋

昔し王待制が船にて漢江よりす、風浪の爲めに繋作せられ
危急甚し、遂に平常誦する所の金剛經を將て水中に投ぜし
に風息み浪靜かなり、後に鎮口に至り舟尾を見るに百歩の
外に一物あるに似て出入時なし、漁者をして之を取らしむ
るに即ち無數の螺螄ありて一龜を圍成す之を刮れば外濕ふ
て内乾く中を視れば廼ち昨、投ずる所の金剛經、毫髪も損

する所なし、嘆じて曰く、且つ漢水は九江に會し南徐に至る所なし、
て數千里、古を窮め今に逮て舟船往來數へ計るべからず、
然も未だ是經を持して彼より此に至る者あるを聞かず、螺
螄一度見て捨てず、それ名の爲にせんや利の爲めにせんや
財の爲にせんや、色の爲にせんや、將に輪廻の生死を脱
せんことを求めんとす、嗚呼萬物の中唯だ人を最靈とす、
それ生畢るまでは是經を聞かざるものあらん、聞て見ず、見
て信ぜず、たとへ信ずるとも名利財色の爲めに蕩没して親

しく受持する能はざる者あらん、尙螺螄にだも如かず、
之を最靈を謂は、孰かゆるさん哉。

贊金剛經和訓印施之勝行

子就父兮弟順兄

金剛正体自分明

晨昏一讀信心處

無我無人和氣平

提鈿斧山盥焚拜題

金剛般若波羅密經

(天松居士節約)

須菩提意に於ていかん、身相を以て如來を見るべし不や、
不なり世尊、身相を以て如來を見ることを得べからず、何
を以ての故に、凡そ所有相はみなこれ虚妄なり、若し諸相
の非相なることを見れば即ち如來を見ん。
是の諸衆生は、復た我相人相衆生相壽相無く法相も無く亦
非法相も無し。

色に住して心を生ずべからず、聲香味觸法に住して心を生
ずべからず、應に住する所なくして而かも其心を生ずべし。
諸心みな非心たり、是を名けて心と爲す、所以はいかん、
須菩提、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可
得なればなり。
須菩提、我が阿耨多羅三藐三菩提に於て乃至少法も得べき
もの有ることなき、是れを阿耨多羅三藐三菩提と名づく。
無我無人無衆生無壽者を以て一切の善法を修すれば、即ち

阿耨多羅三藐菩提を得。

須菩提、阿耨多羅三藐菩提心を發するものは一切の法に於て、應さに是の如く知り是の如く見、是の如く信解して法相を生ぜざるべし。

須菩提、言ふ所の法相なるもの如來は即ち法相にあらず、是を法相と名くと説く。

如何か人の爲めに演説せん、相を取らざれば如々不動なり何を以ての故に、一切有爲の法は、夢幻泡影の如く、露の

如く亦た電の如し、應さに是の如き觀を作すべし。

補闕圓滿眞言

唵、呼嚧呼嚧、社野穆契、娑婆訶

を満足せんことを誓ふ、伏て希くは特に御賛成の榮を賜り、右無我相の三字を募集する事及び金剛塔を建設する事に關して直接間接に御援助被成下候は、獨り居士の幸福而已にあらず、其功德無邊なりと奉存候

明治四十一年六月

東京市京橋區南紺屋町九番地

發願者

濱

地

天

松敬白

定

電話新橋五八五番

「無我相」の三字は名刺大の紙又は葉書に書記し之に氏名を記入して御送付願敷候事
金剛塔建設に付て金品の寄附を請はず然れども權花一朝の榮は是れ無常なることを悟り徒に多額の財を積んで子孫に傳ふるは寧ろ之を害ふものなることを知り特に金剛經に歸依して喜捨を申込まるゝ如きは敢て辭退せざる所に候事
金剛經を研究し之れによりて心身の健全を得る爲に特に金剛經會を設く金剛經會は知名の講師を請して毎月第一第三の水曜日午後六時より京橋區南紺屋町九番地濱地事務所を假會場として例會を開く來聽隨意に候事

誰でも宇宙の眞理を悟ることが出来る——頗る奇!!

教界唯一の好雜誌

願日置默仙

禪

月刊雜誌

主筆新井石禪

木人方歌石女起舞

看よ！本誌は複雑なる社會の羅針盤なり……

- ▲壹部金拾錢郵稅五厘
- ▲一年送料共壹圓廿錢
- ▲振替口座東參參五番

讀め！本誌は混沌たる現代の救濟藥なり……

誰でも處世の秘訣を得ることが出来る——頗る珍!!

購讀申込所

一喝社

東京市芝區久保町拾番地

此れ迄になき禪の組織的教理

西有禪師 題字
森田禪師 題字
日置老師 題額

生人と禪

新井老師校閲
岡田摘翠師著
井上哲博士跋

【錢六税郵錢拾七部一價定】

つ斷を麻亂の生人くよ也乃名は禪

然瞭目一教宗理倫學哲

社 喝 一 所 行 發

地番拾町廣保久西區芝京東
番五三三京東座口金貯番振

成る程と頷かれる通俗的書物

259
422

